

# 災害後の子どもたちの心と体のケア

対象

医師、保健師、看護師、養護教諭、教諭、保育士等、学校関係者

- 日時 平成25年10月27日(日) 10時00分～16時00分(開場9時45分)
- 場所 福島県郡山市ビッグアイ(郡山駅隣) 7F大会議室  
〒963-8002 郡山市駅前二丁目11番1号  
TEL 024-931-2700
- 代表世話人 福島県小児保健協会会長、福島県立医科大学看護学部生命科学部門教授 鈴木 順造
- 主催 日本小児保健協会
- 後援 福島県、福島県教育委員会、福島県医師会
- 会費 無料
- 定員 先着240名

\*お食事は、各自ご用意下さい。会場内でのみ、飲食が可能です。

## プログラム：

- 10：00 開会挨拶 岡田 知雄(日本小児保健協会会長)  
座長 鈴木 順造(福島県小児保健協会会長、福島県立医科大学看護学部生命科学部門教授)
- 10：05～10：45(40分) 『日本の子どもたちの真の復興は福島から！』  
.....仁寿会 菊池医院 菊池信太郎
- 10：45～11：35(50分) 『小児の肥満とその対応』  
..... 日本大学医学部小児科教授 岡田 知雄
- 11：35～12：15(40分) 『小児の肥満と栄養』  
..... 和洋女子大学 生活科学系准教授 杉浦 令子
- 12：15～13：00 <昼食休憩>  
座長 平岩 幹男(Rabbit Developmental Research)
- 13：00～14：20(80分) 『子どもをもっと好きになる"いのちの授業"]  
.....近大姫路大学看護学部准教授、バングラデシュBSMM大学客員講師 岸田 敦子
- <休憩>  
座長 岡田 知雄(日本大学医学部小児科教授)
- 14：30～15：30(60分) 『ほめて育てる』.....Rabbit Developmental Research 平岩 幹男
- 15：30 閉会挨拶 鈴木 順造(日本小児保健協会理事)

(敬称略)

# 災害後の子どもたちの心と体のケア

日本の子どもたちの  
真の復興は福島から！

## 菊池信太郎

医療法人仁寿会 菊池記念こども保健医学研究所 副所長  
菊池医院 副院長  
郡山市震災後子どもへのケアプロジェクト マネージャー  
NPO法人 郡山市ベップ子育てネットワーク 理事長



### ● 略歴

1996年(平成8年) 東京慈恵会医科大学卒業  
2000年(平成12年) 慶応義塾大学医学部大学院修了  
同 済生会宇都宮病院小児科 勤務  
2005年(平成17年) 国立成育医療センター呼吸器科 勤務  
2010年(平成22年) 医療法人仁寿会 菊池医院 勤務  
2011年(平成23年) 郡山市震災後子どもへのケアプロジェクト組織  
2012年(平成24年) NPO法人 郡山ベップ子育てネットワーク設立  
2013年(平成25年) 復興庁復興推進委員就任  
専門:小児科一般、小児呼吸器  
資格:日本小児科学会専門医、日本体育協会公認スポーツドクター、日本医師会認定産業医

東日本大震災からあっという間に2年半が経過しました。放射線汚染によって子ども達の生活環境は大きく一変してしまいました。しかし、子どもや保護者の抱えている問題とは裏腹に、風化と忘却は急速に進行し当地ですらその問題意識が希薄になりつつあります。

「郡山市震災後子どもへのケアプロジェクト」は、PTSDの発症予防を目的として設立しましたが、時間の経過と共に心のケアだけでは不十分であることが判明しました。子ども達の心と体が健康に育まれ、保護者にとっても望ましい子どもの成育環境を作っていく必要性があります。

子ども達の運動不足や体力低下、肥満児の増加は、実は全国的にも30年前から指摘されていま

したが、今の福島環境はその問題がより顕著になっているに過ぎません。いかに子ども達にとって望ましい成育環境を作り出すか。私たちの活動の結集である PEP Kids Koriyama は、その一つのモデルであります。福島子ども達を『日本一元気』しようという私達の数々の取組が、福島のみならず日本中の子ども達を真に元気にすることを信じています。

## 小児の肥満とその対応

### 岡田 知雄

日本大学医学部小児科学系小児科学分野



### ● 略歴

現職 日本大学医学部小児科教授  
1976年3月31日 日本大学医学部卒、同年6月1日 日本大学医学部小児科小児科助手  
2002年5月19日 イリノイ大学Human Nutrition留学  
2010年7月1日 日本大学医学部小児科教授 現在に至る

近年、わが国の子どもをとりまく成育環境の変化には著しいものがあります。食の欧米化として脂肪摂取が増加し逆に和食の嗜好が低下、また子どもがみんなでのびのびと遊べる空間が無くなり、屋内でのテレビやPCなどのscreen timeが増加し、次第に身体活動が減り体力の低下も指摘されています。これと並行して小児の肥満が増加し、既に現状でも成人と同じような脂肪肝や耐糖能異常、高脂血症が、内臓脂肪の増加と合併して非常に多く認めるようになりました。一方、成人の慢性疾患としてメタボリックシンドロームや糖尿病が若年期から現れ、心血管病、悪性腫瘍が増加している現状は周知の如くです。

子どもの肥満対策の注目点は、家庭における環



境整備の一言に集約されるといっても過言ではありません。朝起きてから寝るまでの毎日の生活習慣のどこひずみがあるのかを探ることも重要です。福島でも問題となっている外遊びができない状況は、遊べる場所の無い都市部と共通の状況です。幼児期から、体を動かすことの楽しさを知らずに育つ例も珍しくありません。個々への健康状態の評価と対応と同時に、子どもを取り巻く環境の整備や改善を行政に働きかけて行く努力も当然必要になります。肥満を改善するための方法を含めお話したいと存じます。

## 小児の肥満と栄養

杉浦 令子

和洋女子大学生活科学系准教授



### ● 略歴

2012年3月東邦大学大学院医学研究科医学専攻博士課程(内科系小児科学専攻)修了(医学博士)。管理栄養士。和洋女子大学助手補、助手、専任講師を経て2010年より現職。2004年イギリスオックスフォードラドクリフ病院栄養部留学。一般財団法人脳神経疾患研究所附属総合南東北病院栄養管理科、公益財団法人児童育成協会こどもの城小児保健部、医療法人社団東光会戸田中央総合病院小児科の非常勤管理栄養士として小児肥満の栄養管理に従事。

小児肥満の栄養管理で最も重要なことは、子どもの正常な成長を保証するために身長・体重成長曲線、肥満度曲線を描いて経過をみながら対応することです。今回は、乳児、幼児、学齢期の単純性肥満を対象とした栄養指導についてお話しします。

乳児早期に急激に体重が増加している場合は、成長速度曲線を検討して単純性肥満か症候性肥満

かを早期に判断することが重要です。体重の増加速度が減じている状況での乳児期肥満は注意深い経過観察のみでよく、特別な対応を行う必要はありません。幼児期肥満では早期に発症して、肥満度が進行性に悪化する予後が悪い肥満を中心に正しい食習慣や生活習慣、運動習慣の確立を目指した栄養指導を行います。このとき家族の理解と協力を得る方策を練ることが最優先課題です。学齢期肥満では肥満症やメタボリックシンドロームの治療に重点をおきますが、実効性をあげるには給食の対応や健康教育を行う学校との連携も欠かせません。小児肥満の栄養指導は本人と家族を対象としたきめ細やかな個別対応が大切です。

## 子どもをもっと好きになる“いのちの授業”

岸田 敦子

近大姫路大学看護学部准教授、  
バン格拉デシュB SMM大学客員講師



### ● 略歴

群馬大学医学部保健学科卒。国際医療福祉大学大学院博士後期過程国際協力学専攻満期単位取得退学。東京大学大学院医学系研究科GHLP修了。心理&性カウンセラー。助産師、保健師。病院、保健センター、大学勤務などの経験を生かし、幅広い年齢層の心と性の相談にのっている。また、“いのちの授業”の専門家として全国で講演を行っている。著書：「愛する二人のSEXの授業—ココロもからだも満たされる—」(若い頃、和太鼓を通じて福島の皆様と交流。今でも家族付き合いをさせていただいています♪)

本日は「子どもをもっと好きになる—いのちの授業—」と題し、ライブ形式で授業をお届けします。市民の皆様におかれましては、授業をリラックスしてお受けいただけましたら幸いです。教育、



医療、保健、福祉など、子どもたちに関わる専門家の皆様におかれましては、虐待・いじめなどを未然に防ぐ教育の在り方について、また、子どもたちの自己肯定感UPを促すヒントとして、参考程度に何か感じていただけましたら、光栄に存じます。

本授業は、2010年小学生を対象に始めたものですが、今では内容を少し変え小中学生から大学生、大人の方に対しても行うようになりました。また、専門家の方たちを対象に、アクティブラーニングとしての“いのちの授業”組み立て法を学会、研修会を通じてお伝えしております。

福島県民、郡山市民、また福島に関わる全ての方々のご健康とお幸せを祈りながら、本日は講師を務めさせていただきます。心より感謝をこめて。



## ほめて育てる

平岩 幹男

Rabbit Developmental Research



### ● 略歴

1951年戸畑市(現北九州市)生まれ、1976年東京大学医学部卒業、三井記念病院小児科、1978年帝京大学医学部小児科、1992年戸田市立医療保健センター、2001年母子保健奨励賞、毎日新聞社賞、2007年同退職、Rabbit Developmental Research 開設。日本小児保健協会理事、日本小児科学会監事、埼玉小児保健協会会長、独立行政法人国立成育医療研究センター理事、主要著書：自閉症スペクトラム障害：療育と対応を考える。岩波書店。2012など

子どもたちにとって健やかに成長する上で、自尊感情(self-esteem)を高くすることは、日常生活の質を充実させるだけではなく、将来への希望や展望を持つためにも重要である。self-esteemを高めるためには、きちんと自分が認められることが大切であるが、そのためにはほめることが欠かせない。ほめるということについて、評価をされないこともあるが、これはほめられた側にとっても、ほめた側にとってもself-esteemを高めることにつながる。発達障害を抱えている場合や、さまざまな環境負荷やこころの問題を抱えているときには、どうしても「できない」ことが気になりがちであるが、そうした場合にこそ欠点やできないことに注目するのではなく、「できる」ことを認めてほめること、「できる」ことを増やしてほめることこそself-esteemを高め、子どもたちの未来を拓くことにつながることを心して子どもたちに向き合っていきたいと考えている。

お申し込み方法：別紙申込書をFAX、または電子メールにてお受付いたします。

電子メールの場合は、件名「第4回市民公開セミナー申込み」とし、事務局 [jsch-soc@umin.ac.jp](mailto:jsch-soc@umin.ac.jp) までお申込みください。(http://www.jschild.or.jp/HPに申込用紙フォーマット有)

\*後日、メール・FAXにて受付通知書をご返信いたしますので、当日必ずご持参ください。

お問合せ先：日本小児保健協会 事務局

〒112-0004 東京都文京区後楽 1-1-5 第一馬上ビル 9階

電話 03-3868-3093 FAX 03-3868-3092

E-mail [jsch-soc@umin.ac.jp](mailto:jsch-soc@umin.ac.jp)